

モンテッソーリ治療教育法の原理

～モンテッソーリの幼児教育観におけるイタルとセガンの生理学的教育の影響～

中 織 江

(大阪市立大学)

はじめに

インクルーシブ教育が、叫ばれる現代、治療教育の研究の意義があると私は考えた。発達程度の大きく異なる子どもを同じクラスで教育しようすれば、専門知識も要求される。またクラス内でも、配慮が必要となる。その時、私はモンテッソーリ教育法に出会ったのである。

彼女は、精神科医として、知的障害児教育に携わり、また、30歳の時、ローマ大学哲学科に再入学し、心理学、哲学も学んだ。いわゆる、医師としての知見も教育者としての道徳性も兼ね備えた人物なのである。その彼女が、障害児と普通児との関わりについて研究する中から、独自の教育法を生み出したのである。私は、そこにインクルーシブ教育の直面する問題を解決する糸口があると感じた。

そこで、現代の学級崩壊の原因の一つを解決するべく、ADHD (Attention Deficit Hyperactivity Disorder)、LD (Learning Disability) との統合教育実現の可能性への教育を考えることから、現代にも通じる幼児教育論を考えようと思ったのである。モンテッソーリ (Maria Montessori, 1870~1952) は現代にも通じる「子どもの家」での彼女自身の体験に基づいた教育法から、私たちに何を教え、何を伝えたかったのかを考察していきたい。

本研究においては、モンテッソーリの特に初期の時代に着眼し、彼女の治療教育法の原理とも考えられる「生理学的教育」について、彼女の処女作『モンテッソーリ・メソッド』を中心に考察する。また、モンテッソーリの治療教育の形成過程において、多大な影響を受けたと彼女自身も語っているフランスの医師、ジャン・イタル (Jean Mark Gaspard Itard 1774~1838) およびエドワール・セガン (Edouard Onesimus Seguin 1812~1880) を中心に「生理学的教育」を解き明かし、彼女の足跡を辿りつつ、彼女の幼児教育の特質を究明し、その治療教育法の原理が、いかに、現代教育に示唆を与えるものであるかを明らかにしていきたい。

1. モンテッソーリ治療教育法に影響を及ぼしたイタルとセガンの感覚教育論

(1) イタルの野生児の教育

18世紀の末から19世紀にかけて、それまで教育

不可能としてかえり見られなかった知的障害児の教育が創始された。彼は、その先駆けとなり、野生児、ピクトールという少年を、科学的手段を通して治療を行い、教育を実践し、その結果として教育学に変革をもたらした。そのイタルの考えの特徴は「生理学的方法」という。生理学的方法とは、イタルによると、「感覚器官と運動系統の作用によって、知性と感覚活動とを、つまり知性の活発化と身体運動とを結合する方法である」という。

また、この「生理学的方法」はイタルによって2つの原理に発展させられた。その第一の原理は、訓練によって個々の感覚を分離させること、第二の原理は、はじめに2つの対照的に大きく異なった感覚印象を与え、次に微妙な相違を認識させること、である。この2つの原理は後に、モンテッソーリが二人の原理を基に「子どもの家」で実験を行い、彼女の治療教育の基盤となる原理となったのがわかる。

(2) セガンの知的障害児の教育

モンテッソーリが、自己の「生理学的教育」観を生み出すにあたり、多大な影響を与えたもう一人の人物がセガンである。彼は、イタルの野生児の教育から受けた理論中心の影響に対し、さらに具体的な方法を提示した。

それでは、このセガンの「生理学的方法」を用いたプログラムとは如何なるものだったのか。それは、彼の著書『白痴』(1866)の中に「生理学の歴史」と題する章において、イタルのプログラムを修正して、1、感覚の発達、2、知的能力の発達、3、情緒能力の発達としてまとめた。ヘンゼル (Hensel) 著『精神遅滞児の生理学的教育』(Die physiologische Erziehung der) によると、セガンの教育法は、知的障害児の「不完全な諸機関に閉じ込められた精神」に対して、最初に自己の筋肉や模倣や神経や反射などの諸機関を出来る限り運動として、活動させるところにあるが、それは、「一般教育」「筋肉教育」「模倣」「感覚教育」という「三つの仮説」によって行われるものであると説明している。この方法により、知的障害児の教育を進めると教育を阻害するような多様な運動異常が見られるが、その矯正にセガンは、「体育」を重視し、同郷の人であったアモロス (Amoros) に従って独自の装具を導入し、その助けによって純粋に物理学的筋肉訓練が次第に生理

学的感覚訓練へと導くことが教育であると考えていた。セガンは、感覚教育をイタールよりも具体的に、子どもが触覚、視覚、聴覚の三つの感覚を用いて行う精神活動をその順序に従っていかに解明するかということに力を注ぎ、子どもの教育に応用した。

2. モンテッソーリ治療教育法の原理としての「生理学的教育」の概念

1900年、イタリアのローマで最初の国立特殊児童学校として、医学的教育学的治療施設が開設された。そこにモンテッソーリは、ローマの精神病院に収容されていた知的障害児を連れてきて、医学的治療だけでなく教育的治療の観点からの治療にも意義を見出して行った。

それでは、モンテッソーリ治療教育法の原理とは如何なるものだったのか。それは、阿部の考察を参考にすると、彼女の繰り返しの実験の賜物に違いはないが、同時に、そこには、先人の幾人かの思想を感じとることができる。彼女の教育は、イタールやセガンの感覚訓練に基づく教育をし、セガンの考案した教具、医学的治療法の体操、セガンの体操と機能訓練、フレーベルの恩物などを組み合わせ、指導法も彼らの段階的漸次的教授法を取り入れていることが分かる。

この「モンテッソーリ法」の特徴と、彼女の教育の意図とは、何だったのか。それは、障害児の機能訓練による訓練効果という意図もちろんあっただろう。しかし、モンテッソーリが真にこの教育法で述べたかったことは、むしろ、医学的な訓練ではなく、教育的な意図の方にあったのではないかと私は思う。モンテッソーリは『モンテッソーリ・メソッド』の中で、次のように述べている。「感覚練習は一種の自己教育をつくり上げる・・・指導者は子どもを感覚から観念へ具体的なものから抽象的なものへ、そして諸観念の連合へ導くように干渉しなければならない」と。

彼女は子どもの反応や分析を基に方法と教具の改良を行い、セガン教具を生活行為、学習の発展へと繋がるように改良した。つまり、知的障害児を自立した生活者とするための一連の訓練体系の教具を作り上げるというのが、彼女の改良の意図だったのである。モンテッソーリが文字や数に関心を注いだのは、彼らの精神を活動させるには、ただ機能や感覚を働かせるだけでは無理であるという認識をもったからである。これは彼女のセガン教具への批判でもある。精神は知性であるという仮説のもとに、セガン教具の応用、改良からそれらの教具を開発し、成功を修めたのである。

以上でわかるように彼女はセガンの教育や思想のす

べてを継承する意図で研究、開発したのではない。このことが、モンテッソーリ法という独自の方法の開発にも繋がったが、集団や社会における生活や経験、遊びにおける生活や経験、遊びにおける想像性の意味を積極的に位置付けないことにも繋がった。彼女のセガンの教育法を見る視点は、あくまで人類学で習得した視点なのである。従って彼女は、セガンの子どもの個別研究から出発する姿勢と、生理学的方法に基づく治療教育法の原理としての「生理学的教育」の概念のみを重んじたのである。

3. モンテッソーリ治療教育法の原理に基づいた幼児教育の原点と今後の幼児教育について

「モンテッソーリ法」は「子どもの家」で初めて普通児に対して幼児教育実験をすることとなった。彼女は、その原理について『自発的活動の原理』の中で、「発達能力のない子どもとまだ発達が表れてない子どもとは発達の課題に共通性があるとし、幼児を対象とすることにした」と述べている。

彼女は、治療教育法の原理を、幼児教育の原点と考えていた。彼女が、幼児教育に託したものは、予防的社会観から、不道德、墮落、犯罪の根源である環境に育つ幼児を、望ましい道徳性を備える人間に発達させることだった。その教育原理は、教育学的人類学研究にセガンの発達分析を項目化し、子どもの個人記録表をつけ、分析することより始まる。教師はいつも影の存在、教師が直接的に教えたり、影響を与えるような指導を行うのではなく、子どもが正しくない方向に行く時のみ注意をする。という環境条件のみを設定する、子どもの主体性を重んじる指導であった。その意義を彼女は、子ども自身の内的生命力、即ち、自己教育できる力の育成に力を注いでいく教育であるとする。

今、21世紀を迎え、文部科学省では、「生きる力」の育成を教育のスローガンとしている。また、世界では、教育は、統合教育から、インクルーシブ教育への移行を考え始めている。その時、幼児期からの教育の内容いかににより、その障害の差を個性とし、互いの不得意な部分を補う、一人一人の人間のよさを尊重できる人間教育を願いたいと筆者は、思う。筆者は幼児教育の重要性を訴えるが、その場合、ヒューマンズを基盤とするモンテッソーリ治療教育法の原理は、現代的幼児教育のあり方に示唆するところ小さくないと考えるのである。

<参考文献>

- ・モンテッソーリ著 阿部真美子他訳 『モンテッソーリ・メソッド』 明治図書 1974
- ・モンテッソーリ著 阿部真美子他訳 『自発的活動の原理』 明治図書 1990
- ・中 歳 江 2002 修士学位論文 『モンテッソーリ治療教育の形成過程について～イタール、セガンを中心として～』